D. H. ロレンスの旅の意味

川崎医療短期大学　一般教養
清　水　雅　子
(昭和60年9月10日受理)

The Meaning of D. H. Lawrence's Travel

Masako SHIMIZU
Division of General Education,
Kawasaki College of Allied Health Professions
Kurashiki 701–01, *Japan*
(*Received on Sept.* 10, 1985)

概　　要

D. H. ロレンスは旅の人であった。彼は旅の途上で優れた紀行文を書き，それぞれの土地を舞台に思想的発展をみせる小説や詩を書いた。その中には，ロレンスが感応することが出来た the spirit of place（土地の霊）が息づいている。本稿では，その spirit と有機的なつながりをもつロレンス特有の語 'darkness' がになう意味を考察することによって，彼の旅の意味を問う。

Abstract

It is often said that D. H. Lawrence was a traveller. As he stayed in Italy, Sicily, Ceylon, Austraria and Mexico, he wrote some excellent travel books as well as many novels and poems and other works in which he revealed his developing thought. In the sentences of his works we could find the spirit of place he could be inspired on his staying places breathing.

In this thesis, we are going to discuss the most Laurentian word 'darkness' which has an organic connection with the spirit of place and make clear the meaning of Lawrence's travel.

(1)

D. H. ロレンスが祖国イギリスをあとにしたのは1912年5月3日，29才の時であった。その後第一次世界大戦の間，イギリスに滞在せざるをえない期間がありはしたが，1930年3月1日，風と光に満ちた南フランス，ヴァンスにおいて44年の生涯を閉じるまで，彼は憑かれたように旅を続けた。

我々は，ロレンスの旅の軌跡からひとつの志向を見出すことが出来る。それは滞在した土地がイタリー，シシリー島，オーストラリア，ニューメキシコなど，不思議と文明から遠ざかっ

た土地であったことである。そして，その旅先で彼は優れた紀行文 *Twilight in Italy, Sea and Sardinia, Mornings in Mexico, Etruscan Places* を書き，又，それぞれの土地を舞台にして，思想的発展をみせる小説を書いた。本稿において，彼の旅の意味を問うことは，彼を旅行者としてでも，文明からの逃避者としてでもなく，彼の夢を実現出来る somewhere を求め続けた utopian として，同時に somewhere を作品という imagination の中で追求した文学者としてとらえることであり，彼の文学に現われた哲学の意味を問うことである。

(2)

ロレンスは旅の途上で，土地に住む人々や生活，自然，風物などを，時にはユーモラスに，時には愛情深く，時には辛辣に生き生きと描いた。彼は spirit of place に鋭く深く感応し，それを言語に表現することが出来た稀有な作家であった。紀行文ばかりでなく，小説にも詩にもすべてにわたって，土地の霊は量的に質的に大きな位置を占めている。たとえば，*Sons and Lovers* や *The Rainbow, Lady Chatterley's Lover* には，ロレンスの故郷であるイギリス中部ノッティンガム周辺の炭抗町，*Women in Love* や *Twilight in Italy* にはアルプスチロルの雪と氷，*Plumed Serpent* や *The Woman Who Rode Away* には，荒涼としたメキシコの土地やアメリカインディアンが描かれている。それらの土地の描写は，作品の背景であるというよりも，土地の霊が登場人物の心理や行動，人間関係にまで強く働きかける様相を呈して作品の主要素となっている。ロレンスの旅における人や花や事物との様々な出会いは，新しい創造を成す過程において重要な役割を果たしているのである。詩 *Bavarian Gentians*（「ババリアのりんどう」）にも，旅における実際の花との出会いが，晩年に至って，生と死の新しい創造そのものに昇華した例をみることが出来る。

BAVARIAN GENTIANS[1)]

Not every man has gentians in his house
in Soft September, at slow, sad Michaelmas.

Bavarian gentians, big and dark, only dark
darkening the day-time, torch-like with the smoking blueness of
    Pluto's gloom,
ribbed and torch-like, with their blaze of darkness spread blue
down flattening into points, flattened under the sweep of white day
torch-flower of the blue-smoking darkness, Pluto's dark-blue daze,
black lamps from the halls of Dis, burning dark blue,
giving off darkness, blue darkness, as Demeter's pale lamps give off
    light,
lead me then, lead the away.

Reach me a gentian, give me a torch!
let me guide myself with the blue, forked torch of this flower

down the darker and darker stairs, where blue is darkened on blueness
even where Persephone goes, just now, from the frosted September
to the sightless realm where darkness is awake upon the dark
and Persephone herself is but a voice
or a darkness invisible enfolded in the deeper dark
of the arms Plutonic, and pierced with the passion of dense gloom,
among the splendour of torches of darkness, shedding darkness on the lost bride and her groom.

1912年8月，ロレンスは妻フリーダと共にアルプスチロルを越えてイタリーへと旅をした折，大きな一輪の青いりんどうを見つけた。フリーダはその時のロレンスについて，「彼はなんだかその花の本性とふしぎな交わりを持っているような，りんどうの花がその青い色，その花の本性をロレンスに捧げているような気がしたことを思い出します。彼の出会うものは何によらず，今生まれたばかりのような創造の新しさを持つのでした。」[2)]（二宮尊道訳）と回想している。我々はフリーダの言うように，りんどうの花の青さに，土地の霊を共有する花の本性を感応することの出来たロレンスに，作家以前の人間としての資質を，詩の創造の過程で blue と darkness を反復することによって，暗黒における“死”をイメージ化したロレンスに作家としての資質を見出すことが出来よう。smoking blueness（けぶるような青さ），Pluto's dark-blue daze（プルートーのめくるめく暗い青さ）blue darkness（青き暗さ），のりんどうのたいまつをかかげて降りてゆく階段は，the darker and darker stairs, where blue is darkened on blueness（青が青の上に重なり，暗さが更に暗さを増す）の“死”への階段を意味する。りんどうの暗い青は闇に輝く光を放ち，花の青き暗さと一体となっての死の世界の探求が始まる。“dark” “blueness” “blue-smoking darkness” “darkblue” “darker and darker stairs” “the splendour of torches of darkness”というように，blue に darkness を重ねて，次第に全き darkness へ入っていくことによって，暗黒での死の世界が創造される。Bavarian Gentians の darkness は，ロレンスが体験によって触発されて創造した imagination における死の意味をになう語である。

作家研究には様々なアプローチの方法があり，どの道も遅かれ早かれ作家の本質に到達するわけであるが，ロレンスの場合も，研究方法は勿論，研究対象が小説でも，詩でも，手紙でも，紀行文でも何であれ，同じテーマを巡って書かれており，最後はひとつのところに行きつくように思える。彼がよく用いた語，flesh, soul, God, religion, sun, star, moon, cosmos, snow, woman, womb, instinct, darkness 等すべて互いに有機的なつながりを持つ語であり，テーマと深く関わる語である。これらの語の中で，darkness は語に含まれる意味内容が，テーマの展開と共に広がり深まった語のひとつであり，新しい創造の過程において不可欠な語である。本稿では，ロレンスの旅に呼応して変化する darkness がになう意味を考察することによって，彼の旅の意味を問う。

(3)

darkness (闇) は通常 light (光) と対立する存在とみなされている。ロレンスの初期の作品に現われる闇も又，光と対比してとらえられている。たとえば，*Sons and Lovers* (1913) の最終章は2頁にわたって闇が描かれているが，ポールの母親の死をイメージ化した闇は，闇への恐怖に打ち勝ったポールがようやく足を向ける町のきつね火が暗示する光と対比されている。この後執筆された *Twilight in Italy* (1916) に収められた *The Spinner and the Monks* は，闇と光の対比構造が，語，文，パラグラフ，情景描写にまで及び，作品の主要素となっている作品であるが，闇におけるひとつの価値転換がなされていることを，末尾の文が示している。

> Where is the supreme ecstasy in mankind, which makes day a delight and night a delight, purpose an ecstasy and a con-course in ecstasy, and single abandon of the single body and soul also an ecstasy under the moon? Where is the transcendent knowledge in our hearts, uniting sun and darkness, day and night, spirit and senses?[3)]

ここでロレンスは，闇を光との対比でとらえながら，光との共存をめざし，闇と光との調和をめざしている。それは，*Sons and Lovers* から出発し，*The Rainbow* (1915)，*Women in Love* (1920) へと作家として成長をみせたロレンスの闇に含む意味内容が変化していることを示している。その変化，あるいは価値転換は，*The Rainbow* では，フレッドの結婚式の場面，アーシュラとアントンが体験する闇に，次のように描かれている。

> The darkness seemed to breathe like the sides of some great beast, the haystacks loomed half-revealed, a crowd of them, a dark, fecund lair just behind. Waves of delirious darkness ran through her soul. She wanted to let go. She wanted to reach and be amongst the flashing stars, she wanted to race with her feet and be beyond the confines of this earth.[4)]

アーシュラが体験する闇は，「巨大な獣の横腹のように」大きなうねりのような生命力をもって彼女にせまってくる。そして神秘的な力で彼女に新しく生まれ変わる苦しみを要求する。その闇はアーシュラが踊る体の動きにつれて，肉なる神の様相を帯びてくる。ここに闇は光に対立する常識的な対比関係とは異種の領域に属する語として現われてくる。

その価値転換がいかなるものかを，最もよく伝えるのが，以下に引用する *Sons and Lovers* 執筆後に私信の形で書かれた *Foreword to "Sons and Lovers"* と，同時期に友人コリングスにあてられた手紙の中のことばである。

> And the Father was Flesh. For even if it were by the Holy Ghost His spirit were begotten, yet flesh cometh only out of flesh. . . .
>
> And the Word is not spoken by the Father, who is Flesh, forever unquestioned and unanswerable, but by the Son. Adam was the first Christ : not the Word made Flesh, but the Fiesh made Word....The Father is the Flesh, the eternal and unquestionable. the

law-giver but not the law;...

And God the Father, the Inscrutable, the Unknowable, we know in the Flesh, in Woman. She is the door for our in-going and our out-coming. In her we go back to the Father: but like the witnesses of the Transfiguration, blind and unconscious[5] (Jan., 1913)

My great religion is a belief in the blood, the flesh, as being wiser than the intellect. We can go wrong in our minds. But what our blood feels and believes and says, is always true[6] (17 Jan., 1913)

「父（神）は肉であった。というのは，精神は聖霊によって生み出されたのであるが，肉体は肉体からのみ生ずるからである。」「父は肉体であり，永遠なる疑いない者であり，立法者であるが律法ではない。」と説くことばには，神と子と聖霊の三位一体を転覆し，肉体こそ神であるとする新しい宗教観が確立されている。そしてコリングスの手紙に表明した“血”の信奉も，不可測不可知なる肉体という神に接触する“場”として強調されたと考えられる。*Sons and Lovers* 序文もコリングスへの手紙も，肉体なき精神，精神なき肉体を批判し，人間を全一なる存在として生かすために，肉体の回復を求め始めたことを明らかにしている。神に実体があるとすれば，肉体は必要条件であり，肉にこそ生命の根源があるとする。彼にとって最も大切なことは，生命感に溢れて生きることであった。愛は強制ではなく，内から自ずと沸き起こる感情の発露でなければならない。精神的な愛を強調する現代のキリスト教は，人間の半身のみを生かし，もう半身の肉体を無視する。その結果，人は生命力を失うのだと考えた。ロレンスが Congregational Church の伝統的なキリスト教教育を受けて育ってきたことは事実である。しかし，近代以来多くのヨーロッパの知識人がそうであったように，神なき時を自覚し，新しい神の実在を求めて生きた作家であった。従って，彼自身，「私は元来は，情熱的に宗教的な人間です。」[7] と明言する場合，宗教的とは，既に伝統的という意味では勿論ない。別の新しい，しかし困難な religious quest（宗教的探究）の旅に出た人間を意味しているのである。

“darkness”は，言葉と肉の関係を基盤にして考えると，それは不可測不可知なる神が内在する肉をイメージ化するロレンス的な語である。光は闇に優るかに見えるが，闇がなければ光は存在しないのも同然であるように，闇も又闇だけではもはや闇とはいえない。光と闇は相互に関係しあいながら生かされるべきである。*The Spinner and the Monks* 末尾の “Where is the transcendent knowledge in our hearts, uniting sun and darkness...?” という問いかけは，闇と光が一体となる場所を求め始めたことを示唆し，その場はアーシュラの体験に暗示されている Flesh であることに，ロレンスの人間として作家としての特異性が見られるのである。

(4)

ロレンスが肉の実在を認識するに至った背景にはいくつかの要因が潜んでいる。父は炭抗夫，母は小学校に勤めた経験のある婦人—家庭は階級意識の強いイギリスにおいて，労働者階級と

下層ブルジョワ階級の認識の相違から来る闘争の場であった。それは表面的な相違であったかも知れない。おそらく，父と母に代表される本能と知性に根本的な原因があったと思われる。いずれにせよ，子ども達は5シリングにこだわりながら書物を手離さない華奢な母親に同情的であった。夫に絶望した妻の例として，母親の愛情は子どもに注がれる。それも病弱な体質の子どもに。母の愛は支配的な性質となり，あまりに精神的な少女ジェッシィーとの初恋の破綻の原因となった。生まれ育った炭抗町と美しい自然が残ったジェッシィーの農場。自然を破壊していく炭抗は，文明が産んだ産業主義の象徴となる。—これらの成長過程での要因は，*Sons and Lovers* に余すところなく描かれているが，作家ロレンスの土壌となり，本能と知性，肉体と精神，自然と機械というような二元的要素として，作品に反映されることになった。が，闇における価値転換がなされる直接の動因は，フリーダとの通俗的な，しかし運命的な出会いにあるといってもよい。恩師の妻，ドイツ貴族の娘，3人の子どもを持つ5才年上の女性との結婚は，現代でさえ社会的制裁を受けると思われるが，当時，多くの困難と障害をふたりに課し，善良な人々を傷つけねばならなかったと推測される。又，フリーダが決して理想的な妻であるような女性でもなかったし，ロレンスとの関係も，男と女の闘い，階級の違いからくる闘いの場となった。しかし，彼はフリーダと出会うことによって「不可測不可知なる父なる神を，我々は肉体のうちに女のうちに知る。彼女は我々の出入往来の門である。」と *Sons and Lovers* 序文に断言することの出来る内的転換をなすことが出来たのである。彼がフリーダの中に見出したもの—それは individual な意味でなく， impersonal な意味での女性の本性であった。再にフリーダとの結婚は，イギリスを出奔し，旅に生きる生活を送る要因となったのである。

1912年8月，彼はフリーダと友人の息子エドワード・ディビィッドを伴って，背嚢を背負い，わずかの稿料を手にアルプスチロルを徒歩で越え，イタリーのガルダ湖畔に落ち着いた。彼はそこで「多くの思想はもたないだろうが，健康な顔付きをして強壮な血液をもった」[8] 人々を発見した。既に変革を自己の内になし，対象をみる目を変え，生命とはどんなものであるかを実感していた彼は，人はどんなに金を持とうと，物質をもとうと，地位をもとうと，知識をもとうと，それだけでは決して幸せではない，ということを知っていた。彼が感応したイタリー人の「健康な顔つきと強壮な血液」は，そのような実感が言わせた表現であったろう。

ドイツ人フリーダとの出会い，初めてのイタリーへの旅は，イギリスを外から見る立場に置いた。この時期の小説には，彼が知るイギリス人の類型が，まゆをひそめながら議論のための議論に熱中する知識人，不健康な自己犠牲の愛を押しつける人，客観性と正確さで自己を正当化しようとする科学者，産業の奴隷にすぎない自称芸術家として登場し始める。彼らが本当の生命を生きている人間として扱われていないことは明らかで，その主因をロレンスは彼らの背後にある文明という巨大な化け物に帰する。そしてイギリスを文明という業病にとらわれた国として意識し始める。文明とは，彼には「人類がはやした木のようなもの」で，「生育して花を咲かせて，それから枯れなくてはいけない。」[9] ものであった。彼の目には，枯れつつある，あ

るいは既に枯れてしまった文明—文明が産出した機械，金，理想，宗教，性などに，尚も性こりもなくまといついている人間も又，枯れて生命を失ってしまったと見えた。機械と科学は，人間の果てることのない欲望をつのらせ，人間の内にあった暖かさや心の広さを失わせてしまった，人の営みさえも機械的にしてしまった，と彼は推断した。初めてのイタリーの旅は，彼にガルダ湖畔の土着のイタリー人のような「健康な顔付き，強壮な血液をもつ」暖かさのある人間，そのような人間と人間との関係を，人間が生きる基本とすべきであるという信念を持たせる契機となった。しかし，このささやかな願いを実現するために，その後，彼は多くの言葉を労し，言わんとすることを理解しようとしない人々と闘い，長い旅に生きなければならなかったのであった。

イギリスに対する批判は，第1次世界大戦中，国内に留まらざるを得なかった5年間にますます激しくなる。妻フリーダが敵国のドイツ人であったことからスパイの嫌疑を受け，コーンウォールを追われる身となったことは，「彼の中の何かが決定的に変わった。」とフリーダが語っているほど，深い傷を彼に与えた。又，大戦中，哲学者ラッセルと親交し，新しい宗教的社会の実現を約束したり，友人マリ夫妻とラナーニウム（ユートピア）の建設に情熱を傾けたが，そのいずれも実現することが出来ず，特にラッセルとの交流は，永久に途断える嫌悪なものとなった。

(5)

祖国と人々への深い失望を味わいながらイギリスを離れたロレンスとフリーダは，1920年，シシリー島タオルミーナに滞在して，「輝やかしい太陽と海との熱い日々」[10]を送ることで再び生気を取り戻す。紀行文 *Sea and Saridinia*（1921）には，文明と無縁の土地に住むサルジニアの男や女や子ども達の表情，雰囲気が自由な筆致で表されている。彼にはごく自然に土地の霊を呼びさます才能が備わっていたことは，作家として何物にもまして賜であったと言えよう。我々がいかに地の果てまで旅をしようとも感ずることが不可能な土地固有の spirit を，彼はやすやすと描き出してみせる。その場合，必ずといってよいほど用いられる語が，'dark' 'darkness'であることに，彼の表現特徴がある。例として *Sea and Saridinia* の中にカリオリの百姓の目を描写したパラグラフを引用し，'darkness' の含まれる意味を考えてみよう。

> One sees a few fascinating faces in Cagliari: those great dark unlighted eyes. There are fascinating dark eyes in Sicily, bright, big, with an impudent point of light and a curious roll, and long lashes: the eyes of old Greece, surely. But here one sees eyes of soft, blank darkness, all velvet, with no imp looking out of them. And they strike a stranger, older note: before the soul became self–conscious: before the mentality of Greece appeared in the world.[11]

この描写にみられる 'darkness' には2つのロレンス的思考が考えられる。ひとつは 'dark

eyes in Sicilly' に用いられている dark には，土地の霊から生命を得ている人間の火花のようなものが意味されていることである。既に，*Women in Love* においてロレンスの代弁者バーキンに，「人は永遠に他者との結合に身を委ねなくてはいけない。しかし，それは自己を失うことでなく，神秘的な，均衡と完全性の中に自己を保つことなのだ。ちょうど星と星が均衡を保っているように」[12)]と語らせているように，人とのつながりを宇宙的視野に立ってとらえていた彼は，まず宇宙の生命との関わりの中に身をゆだねるべきだと考えるようになっていた。「生命は，宇宙，太陽，星，月，大地，樹，鳥，動物，人間，そのすべての森羅万象の中に生きた関係にほかならない。」[13)]と言う。カリオリの百姓の dark eyes は，土地の生命を共有している目であり，文明に侵されていないサルジニアの土地は，宇宙の生命力を共有しており，その力はカリオリの百姓に流れ込んで，宇宙，土地，人の生命の輪環の構図が成立するのである。

第2に，そのような連なりを before the soul became self-conscious: before the mental of Greece appeared in the world の状態でとらえていることに意味がある。'darkness' は，百姓自身が気付いていない「無意識」という知性や観念以前の「未知の領域」を含意する。無意識という領域は，初期の作品から内在していた要素であるが，彼が独自の説として確立したのは，*Sea and Sardinia* の直前に執筆した *Fantasia of Unconsciousness* (1920)，*Psychoanalysis and the Unconsciousness* (1921) の2作品においてである。この2部作に展開された無意識を学問的に論議することは空しい。ただここで彼が意図したことは，生の生成過程において，人間の意識は無意識の内に形作られていくということである。特に奇異とも的はずれとも受け取られがちな「太陽叢」の強調は，人間のつながりの最少単位である母と子と父の交流を，肉体の内に，しかも無意識という次元に位置づけていることに意味がある。このように，この時期の 'darkness' は，宇宙と大地と人間とその他諸々の生命ある存在が，無意識にひとつの連環の内で生きているという imagination の中で体現した語とみなすことが出来る。

(6)

タオルミナ滞在中に，ロレンスは以前から考えていたアメリカ大陸渡航を実行に移す。友人ブルースター夫妻に誘われてセイロンに立ち寄り，オーストラリア，サンフランシスコを経て，ニュー・メキシコに到着したのは，1922年9月であった。まるでイギリスから出来る限り遠ざかろうとする意志が働いているかのようであるが，当時の心境を手紙でみる限り，逆にヨーロッパを特にイギリスを思う気持が強まり，イギリス人である自己を認識するようになっている。旧約聖書のヨナに自分をたとえて，イギリスからはみ出したことを間違っていたと考え，「イギリスにおいて結束し，そして生命の火花を成就する。」[13)]ことが急務だと述べている。実際，ニューメキシコから彼は一時帰国したのであるが，現実のロンドンは「恐ろしいところ」，ヨーロッパは「憂愁を与える」[14)]と感ずるのみで，重苦しい気持に耐えきれなくなり，再びニューメキシコへ戻る。荒涼としたメキシコの風土も腺病質な彼の体質に合っていたとは思えないが，

彼にとってリアリティーを有するのは，イタリーやサルジニアの土地の人々に宿っていたような，健康で強壮な血液，暗い原初的な力であった。意識化された観念と知識を寄りどころにしているように思えるイギリスに，彼の魂は結局休まらなかったとみえる。自己が徹頭徹尾イギリス人であることを意識しながら，イギリスに定住出来ないロレンスは，間違っていると思いつつ，「生活の外側」にはみ出して生きることを自己に強いなければならなかったのであろう。

しかし，彼はイギリスに欠如していると考えた「最も本質的な意味で宗教的な力」をニューメキシコの土地に感応したのである。ロレンスをとらえて放さなかったメキシコの土地の霊とは，この宗教的感情であった。紀行文 *Mornings in Mexico* (1927) には，この土地の霊が息づいている。

> To the Hopi, the origins are dark and dual, cruelty is coiled in the very beginnings of all things, and circle after circle creation emerges towards a flickering, revealed God head. With Man as the godhead so far achieved, waveringly and for ever incomplete, in this world.
>
> The American aborigines are radically, innately religious. The fabric of their life is religion. But their religion is animistic, their sources are dark and impersonal, their conflict with their 'gods' is slow, and unceasing.[15)]

この宗教的感情は，感覚の奥深く官能が経験する類のものであると，彼は表現する。更に彼にとって好都合なことに，その感情は sun を信奉する異教の宗教に根づいていたことであった。

> ...Ah, yes, in New Mexico the heart is sacrificed to the sun and the human being is left stark, heartless but undauntedly religious. ... And the utter dark absorption of these naked men, as they danced with their knees wide apart, suddenly affected me with a *sense* of religion, I *felt* religion for a moment. For religion is an experience, an uncontrollable sensual experience, even more so than love: I use sensual to mean an experience deep down in the senses, inexplicable and inscrutable.[16)]

彼はメキシコの人々の生きた宗教感覚は，暗黒において太陽と交歓することから生じ，その太陽は宇宙との接触を保っているがゆえに，絶えず生命の流れから活力を得ることが出来ると解釈した。異教の神ケトアルコアトルを彼は，小説 *Plumed Serpent* (1926) に表し，'Dark Sun'，「朝と夕の星，昼と夜の君主」と表現する。アステカ語でケアトルとは，美しい翼をもつ鳥，コアトルとは地をはう蛇を意味し，名が示すように，天と地を一体に有する Paradoxical being である。この異教の神に，彼は思想と一致する存在を見出したのである。

極めて具体的な血と肉による生命の充足，自己と他者との宇宙の連環における均衡関係の追求を，抽象的な言語世界においてしか実現できない矛盾がロレンスにはあった。Paradoxical being ケトアルコアトルとの出会いは，imagination に表明した「闇」と「光」の調和，融合の可能性に，説得力をもたせることのできる何よりの体験であったと言えるだろう。

(7)

ロレンスは，メキシコ各地を旅した間に執筆したエッセイ *Books* (1942) に次のように述べている。

> Man is a thought–adventurer.
> Man is a great venturer in consciousness.[17)]

彼自身，広大な意識の中を探究してきた旅人であった。「文明という巨大なワナにかかって，道を踏みはずしている現代人は，思考の中に分け入る人間の探求によってのみ失われた道を見出すことができる。」そして「現代にあっては，人間の魂の中に生き生きと輝く探求の火花だけが解決の頼みである。」とエッセイの中で彼は続けて述べている。

これまで見てきたように，精神的な愛を強制し，肉体を軽視するキリスト教に，探求ということは失われてしまった，と洞察するロレンスは，19世紀の終わり，「我々は神を失った。」と慟哭するニーチェの系譜に属する，意識の探究者であった。彼の旅は，内実のリアリティーを有する新しい神の探究の旅を意味していたと言える。それは「血によって人間内部の暗黒の中をひそやかに思考する」無意識の領域での発見の旅— religious quest —とも呼べる旅であった。ニーチェが円環的時間認識の内に自己回復を逐げたように，ロレンスも又，宇宙と太陽と大地と他者の円環的な生命の流れの真中で，人間性の回復を図った文学者であった。彼は旅をすることによって，旅先の土地に，人間が宇宙へ回帰する可能性を見出し，それを imagination の創造過程の糧にしていったと考えられる。土地の霊を言語化する際共起した語 'darkness'，人と対象との同化作用を表す言葉 'darkness'，説明し難い無意識の領域における体験を暗示する語 'darkness' に，天と地を内包する 'Dark Sun' ケトアルコアトルとの接触はロレンスに reality と imagination との合体を実現させたのである。

(8)

1925年マラリアに覆病，奇跡的に回復後，肺結核の診断を受け，再びヨーロッパにもどったロレンスは，現実の死を目前に，筆はますます勢いを増し，旅を断念することもしなかった。古代遺跡エトルリアを訪れ，古代エトルリア人たちの歓びに満ちた死生観に魅かれ，紀行文 Etruscan Places (1932) を執筆し，小説 Lady Chatterley's Lover (1928) に男と女の impersonal な優しさを描き，評論 *Apocalypse* (1931) に独自の宗教観を展開し，中編 *The Man Who Died* (1931) にキリスト教否定と，新しい復活を寓話形式で示唆し，言葉が生み出した奇蹟というべき死の詩を，この晩年の数年間のうちに完成していった。

この稿を，最も美しくロレンスの旅の“決算”が表出されている最後の詩，The Ship of Death [18)] を論ずることで，終えたいと思う。

(9)

Now it is autumn and the falling fruit
and the long journey towards oblivion.
(今は秋，落ちる果実
忘却への長い旅。)

忘却への長い旅とは死への旅。Bavarian Gentians に表された暗黒の階段を降りていく旅。

Have you built your ship of death, O have you?
O build your ship of death, for you will need it.
(君は死の船をつくったか？おお，つくったか。死の船をつくれ，君にはそれが必要なのだ。)

死の船にのりこまなければ，生きたまま死を迎えねばならない。生の意味も知らずに。かつて洪水が押し寄せ，ノアが舟をつくったように。今，洪水がそこまでやってきているから，小さい舟をつくってこぎ出さねばならない。

And die the death, the long and painful death
that lies between the old self and the new.
(かくて死を死せ。古い自己と新しい自己との間にある痛ましい死を。)

忘却への長い旅は，死後の世界 (after death) への旅立ちではない。古い自己を死に，新しい自己へと甦るため，自己の内部に起きる自己変革の苦しい旅を意味する。生の終りでなく，死を死ぬことで生を生きるための旅。

We are dying, we are dying, piecemeal our bodies are dying
and our strength leaves us,
and our soul cowers naked in the dark rain over the flood,
(われらは死につゝある。死につつある。
刻々に肉体は死に，力はわれらから去る。
魂は洪水の上にふりそそぐ暗い雨の中に萎える。)

upon the flood's black waste
upon the waters of the end
upon the sea of death, where still we sail
darkly, for we cannot steer, and have no port.
(洪水が広がる面に，終末の海に，死の海に。
われらはただ闇を行く，
舟をこぐこともできず，目ざすべき港はない。)

only the deepening blackness darkening still
blacker upon the soundless, ungurgling flood
darkness at one with darkness, up and down
and sideways utterly dark, so there is no direction any more.
（ただ深まる闇は音もない洪水の静けさの上に，暗く広がり，闇は闇に溶け，上も下もなく，左も右もなく，ただ暗く，方角もない。）

忘却の旅は，生と死の間にある広大な暗黒をくぐりぬける勇気ある者が向かう旅。静謐をただよう暗黒には，方位もなく，向かうべき港も見えず，舟さえ見えず，光もなく，すべてが消滅し，肉体さえも消えてしまった暗闇。無の世界。人は，広大な暗黒という無の中で，静謐に耐えねばならない。何もない。どこにもない暗黒の世界である。

ロレンスは，自己と他者の生きた交流を求めて旅をしてきた。それは somewhere を求めての旅であった。しかし，死を真近かにして創造されたThe Ship of Death は，地上に utopia はないことを，どこにもないことを啓示する。死の舟が漂う 'darkness' — somewhere でもなく，死後の世界でもなく，実在する何かでもなく，Nowhere を意味する。ケトアルコアトルに，天と地の一致を発見した意識の探究者ロレンスは，自らの内へ内へと，自己内省の旅に出る。人間は本来自らの内に天と地を持つ完全な存在であることの再確認の旅であると言えよう。「外」にあるようにみえるものは「内」にあるのであり，「内」における全体性の崩壊を引き起こした人間が，全体性を回復するには，内省の道しか残されていない。解決は外の somewhere にあるのではなく，ただ nowhere を知った者のみが到達できる religious quest の最後の場にロレンスは行き着いた。「死の舟」はその inner travel に出かけるための小舟である。'darkness' は，もはや，光と闇が対立する二元論の場ではなく，何もない，どこにもない場を意味する。

and the little ship is there; yet she is gone.
She is not seen, for there is nothing to see her by.
She is gone! gone! and yet
somewhere she is there.
Nowhere!
（ただ小さな舟がある。だがそれも消えた。
舟は見えず，見る光がないから。
舟は消えた！消えた！だがどこかにいる。
どこにもいない！）

Bavarian Gentians においてイメージ化されたあお色の暗闇が再び現われる。今度は青でないかすかな蒼。死から生への甦りのあえかな蒼。

And yet out of eternity, a thread
separates itself on the blackness,

a horizontal thread
that fumes a little with pallor upon the dark.

Is it illusion? or dose the pallor fume
A little higher?
Ah wait, wait, for there's the dawn,
the cruel dawn of coming back to life
out of oblivion.

Wait, wait, the little ship
drifting, beneath the deathly ashy grey
of a flood-dawn.

Wait, wait! even so, a flush of yellow
and strangely, O chilled wan soul, a flush of rose.

A flush of rose, and the whole thing starts again.
（永遠からひとすじの糸が，闇の上に現われる。水平のひとすじの糸，闇の面に蒼くけぶって。）

幻か？　やや高くけぶるその蒼の糸は？
ああ　待て，待て，曙だ。
忘却から生命に帰ってくる無残な曙だ。

待て，待て，小さな舟は漂う。
洪水の曙の，死のような灰色の下で

待て，待て！　そうなのだ，黄色の光，
そして不思議にも，あの凍えた魂よ，
薔薇色の輝き，すべてが再び始まる。）

蒼は黄色の光を帯び，黄色は，薔薇色の輝きに変わり，一度死んだ肉体を照らす。死を死ぬことによって，死から生へと，色彩の変化と，力強い Wait, wait. の反復によって，円環思想が啓示される。闇は光なしには存在しない。再び光を見るための闇。死も又，生なしには存在せず，生も死があってこそ意味を有する。

キリスト教の時間は，生から死へ向かう一回限りの直線的時間を意味する。[19] ロレンスの宇宙生命の認識は円環的時間を志向するものであった。彼が imagination の詩の世界で，円環的時間における自己回生の道を表現しえたことに，ロレンスの旅の究極の意味があると考える。

The Ship of Death は，ことばに生命が吹きこまれ，ことばが生命そのものになった創造の奇跡であると言っても過言ではないだろう。彼の spirit of place に感応する天賦の力は，ここに至って，ことばに言霊（ことだま）をこめることが出来たのである。彼の旅は，文明批評家として，思想家として，哲学者として，utopian としてよりも，文学者としてずっと重い意味を我々に提示し

ている。

本稿において，筆者は，ロレンスの旅の意味を理解するために，作家活動初期から晩年に至るまで，'darkness' の意味を軸に，現実の旅を駆けるように追ってきた。理解したことを言葉にしようとすれば，言葉がこぼれおちてしまう感がしている。特に，最後に論じた *The Ship of Death* の解釈は，十分肉迫できていないと実感している。このロレンス文学における宇宙の円環的時間認識については，論を改めたいと思う。

（注）

1) D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1964) p. 697.
2) Frieda Lawrence, *Not I, But the Wind* (Southern Illinois University Press., 1964)
3) D. H. Lawerence, *Twilight in Italy* (New York: Viking Press, 1972)p. 31
4) D. H. Lawrence, *The Rainbow* (London: Heinemann, 1966) pp. 315-316.
5) D. H. Lawrence, *The Letters of D. H. Lawrence* (London: Heinemann, 1956) pp. 95-102.
6) Ibid., pp. 93-96.
7) Ibid., p.190.
8) Ibid., p. 65.
9) Frieda Lawrence, *Not I, But the Wind.*
10) D. H. Lawrence, *The Letters of D. H. Lawrence.*, p. 508.
11) D. H. Lawrence, *Sea and Sardinia* (New York: Viking Press, 1972) p. 67.
12) D. H. Lawrence, *Women in Love* (Penguin Books) pp. 169-170.
13) D. H. Lawrence, *Phoenix* I (London: Heinemann,1967) p.31.
14) D. H. Lawrence, *The Letters of D. H. Lawrence.*, p. 543.
15) D. H. Lawrence, *Mornings in Mexico* (Penguin Books) p. 89.
16) D. H. Lawrence, *Phoenix* I., pp. 143-146.
17) Ibid., p. 731.
18) D. H. Lawrence, *The Complete Poems of D. H. Lawrence.*, pp. 716-720.
19) 滝浦静雄，時間—その哲学的考察—岩波新書